

# 市長賞

和田 紗幸(わだ さゆき) 上柚木小 3年生

作品名:「いしをつんだおとこ」をよんで

図書:いしをつんだおとこ

このお話は、まずしくてねる場所がない男が石をつみはじめ、何十年もかけて石をつんでいたら、とうが完成して、それが男の仕事になっていたというお話です。

私が好きなところは、一回石がくずれたら私ならあきらめそうになるのに、男はあきらめないで、次にまた作るとうのためにたくさん勉強して、とうを完成させたところです。最初は町の人たちが、男に「何だあれは」とか「何がはじまるんだ」とか言っていたけれど、男が毎日あきらめずにがんばって石をつんでいたら、町の人たちのたい度がかわって、いつの間にか男の手だすけをしていました。男も、最初は自分のためにやっていたけれど、みんなのために完成させたいとはりきりました。

毎日コツコツつづける事は、すごい事です。自分のためだとしても、毎日つづけるのはたいくつしちゃうのに、他の人がよろこぶためにつづけるのは、もっと大へんだと思いました。

男は、死ぬ時に、

「いつの間にか、石をつむ事が私の仕事になった。そして、私の生きがいとなった。」

と、言いました。

生きがいってどういう意味かなと思って、調べてみました。「生きていくはり合い」と、書いてありました。だから、「これがないと生きていけない」とか「これがあるから楽しい」という意味かなと思いました。

私にとって、生きがいとは何だろう。でも、この本の男みたいに、毎日む中でできる事はまだありません。だから、何をしている時が楽しいかなと、考えてみました。それは、マンガをかく事です。最初は、キャラクターなどをかくのが好きで、自分が考えたキャラクターでマンガをかいたら楽しそうだなと思いました。家族に見せたら、

「おもしろいね。」

と言われ、私はうれしくなりました。だから、またわらってほしくて、もっとかきたいと思いました。きっと、男も町の人たちにたすけられ、もとめられた事は、うれしかったと思います。そのうれしかった気もちが、男が最後に「生きがいだった」と言った理由なのかなと思いました。

私はまだ生きがいは分からないけど、しょう来は、みんなを楽しませるマンガ家になりたいなと思っています。そのためには、お話を考える力がひつようだと思うので、にが手だけど毎日の勉強もコツコツがんばりたいです。